

「日本事情」における「個の文化」 の意義と問題点

—二つの授業分析から見えてくるもの—

三代 純平

キーワード

「日本事情」・「日本文化」・ステレオタイプ・個の文化A・個の文化B

1. 「個の文化」提案の意義と問題点

「日本事情」教育では、1990年前後より、従来の体系的な知識として「日本文化」を捉えることに対して疑問の声が出始めた。たとえば川上（1999）は、多様な人間、地域、歴史から構成される日本の文化を「日本文化」として画一的に捉えることの限界を指摘し、文化や社会に多様性や異質性を認め、動的なモデルとして捉えることを提案した。また細川（1999、2000、2002a、2002b）は「日本文化」を画一的に捉えることによって文化に対するステレオタイプのな認識が個人間のコミュニケーションを妨げるということの問題化した。そして「日本文化」のように集団で文化を捉えること自体にステレオタイプのな認識にとられる要因を見た細川はそれを乗り越えるために「個の文化」という考え方を提示した。

文化を個から捉えるという姿勢は佐々木（2002）が指摘するように、現代の国家にとられず移動する人々の現状、国家の枠で括り難い文化の多様性、そして、文化には客観的実体がないということなどに裏打ちされている。よって、「日本事情」教育において「個の文化」を提案した意義は、多様で流動的な環境に生きる個人のありさまを集団で典型的に捉えることによって湾曲することなくコミュニケーションをとることにより、言語学習の一つの大きな目標であるコミュニケーション能力を育成できることにあるだろう。だが、後に詳述することになるが「個の文化」という概念には二種類の解釈が混在している。個人が「文化」を認識するという意味と、個人の認識が「文化」であるという意味である。前者の問題は「文化」を集団で捉えることから自由になっていない点であろう。また後者は砂川（2002）が集団の持っている共同主観的なものから目を閉ざしていると批判している。この点に関して、筆者はやや異なる見解があるが、紙面の都合上、深くは立ち入らない。¹

「個の文化」という概念は日本語教育の中から出てきたものであることは注意する必要がある。「個の文化」はコミュニケーション能力の向上という観点と強く結びついて提案

されたものであるといえるだろう。ならば、その理論は、教育の現場の実践といかに結び付けられるかによりその真価が問われるといっても過言ではない。従って、本稿では主に細川（2002a）に即して「個の文化」の概念を整理した後、その実践における差異、またステレオタイプを乗り越えたコミュニケーションの実現という観点においての問題点を明らかにするために、早稲田大学日本語研究教育センターにおいて細川英雄が組織した二つの「日本事情」クラスを分析する。

2. 二種類の「個の文化」

細川の近著である『日本語教育は何をめざすか』（2002a）では、「個の文化」という概念が一つのキーワードになっている。だが、「個の文化」という概念にはしばしば、二つの意味が混同されている箇所があった。「文化」を個人が認識するという意味での「個の文化」と個人の認識のあり方そのものを「個の文化」とするという意味での「個の文化」である。この二つの「個の文化」の違いを明らかにする境界線は確かに曖昧である。個人の認識のあり方を「文化」と自覚した場合はこの二つが重なり合うからである。ただし明らかに違って来る場合もある。たとえば、「日本文化」として何かを個人が認識したときは一つ目の「個の文化」に当てはまるが、二つ目の個人の認識の総体としての「個の文化」には当てはまらないだろう。また、机の上にあるものを「りんご」であると認識すること自体が一つの文化であると後者の「個の文化」では言うことができるが、前者の「個の文化」ではそれを「文化」として認識しなくてはならないので、これは文化にはならない。この二種類の「個の文化」を、仮に一方の「個の文化」を個の文化A、他方の「個の文化」を個の文化Bと呼ぶことにする。個の文化Aは個人が「文化」として認識するものであり、個の文化Bは個人の認識、精神的活動、表現すべての総体を指すものである。

細川（2002a：172）において、「つまり、その個人が『これは文化だ』と感じたものがすなわち、その人にとっては『文化』になる」とあるが、これは「文化」として個人が認識したものが「文化」であるというのだから、個の文化Aに相当する。直後に「その『文化』表象としてのモノ・コト・ヒトを見たとき、それぞれの個人の中に生まれる認識が『文化』認識である」とあるが、ここでは個の文化A・Bの違いは曖昧となる。なぜなら「文化」としての表象を「文化」として認識するという場合の「文化」としての表象は、つまりすべての表象であり、「文化」としての認識はすべての認識を意味するからである。

一方で、「個の文化」をBとして捉えている記述は次のような箇所に見られる。

ここでは、人間の形成する社会とその集団文化の存在を認めつつ、一方で、そうした社会・文化を支える個人一人一人が有する、さまざまな認識とその可変性、あるいは言語活動を通じた思考と表現のあり方を「個の文化」として捉え、その可塑性や創造性について考えていこうとすることで、その活動のもたらす新しい世界を見出そうと試みるのである。〔細川（2002a：179）〕

ここでは個人の認識、「言語活動を通じた思考と表現のあり方」そのものを「個の文化」と捉えていることが明確にされている。

ではなぜAとBに分類して考える必要性があるのか。それはAの立場に立つ場合、ある地点で、Bの「個の文化」の概念と大きく離れてしまう可能性があるからである。細川は

繰り返すが、このような解釈は社会集団としての「文化」の存在を否定するものではない。現に表象としての「文化」の存在によって、わたしたちはそこに「文化」を感じるのである。しかし、その「文化表象」どのように受け取るかは、個人一人一人によって異なるはずである。〔細川 (2002a : 183)〕

と書いているが、この時点で、「集団の文化」を認め、それに対する解釈が各々異なる、その解釈の違いこそが「個の文化」であるという考えが垣間見える。その考えがさらに顕著に伺えるのは次の箇所である。

日本語学習者が社会・文化を理解し体得するには… (中略) …その習得の過程で、日本語や日本の社会の問題について自分で考えてみるという姿勢が求められると思う。〔細川 (2002a : 175)〕

個の文化Aはこの考えに至ったところで、個の文化Bとはかなり隔たったコンセプトになる。なぜなら、Aでは個人の認識は違うので、「文化」は個別に個の中に存在しているものの、個人が「日本文化」のように「文化」を集団でカテゴライズして認識していることには相違ないからだ。そもそも、個人の認識は、それを自覚化しようともしなくとも違う。だが、たとえ個人が個人の認識に基づいたとしても、集団を画一的に捉えてしまっただけではステレオタイプの認識から自由になることはできない。個の文化Bは文化を集団で括ることの限界から、個の認識、精神活動、表現などのすべてを「個の文化」とするという概念なので、この地点においてAとBの間には明らかな溝ができるといえるだろう。

以上のように、個が「文化」と認識したものである個の文化Aは、それが「日本文化」などの集団類型の形で認識される限り、ステレオタイプの罠に嵌ってしまう。だが、最近、個の文化Aの立場に立つ研究者が多いようである。たとえば、小川 (2002 : 213) は客観的な文化は存在せず、主観的な認識でしかないことを主張し、学習者を「日本文化を認識する個人」・「一つの「日本人論」を生み出す主体」と捉えることの重要性を説いている。

それに対し、個の文化Bは個人の認識を「文化」とする点において、集団類型化の罠に陥ることはない。よって、筆者は個の文化Bの意味での「個の文化」という概念により重要性を見出している。そして、その「個の文化」を、つまり「個の認識」、あるいは「個人の伝えたいこと」を自分で論理的に把握し、他者に発信していく力、また、他者が発信する「個の文化」を受け止める力、すなわち「文化リテラシー」を鍛える教育こそが「文化」を扱う「日本事情」教育にもっとも必要とされることではないか、と筆者は考えている。なぜなら、日本語教育がコミュニケーション能力の向上を目指すならばこの「文化リテラシー」が不可欠であると思うからである。

では、個の文化Aを単純に否定し、個の文化Bを支持すればよいのか、というところを割り切れるものでもない。なぜなら、「個の文化」という概念が日本語教育の中で持ち上がった根底には個と個のコミュニケーションを阻んでいるステレオタイプという問題があるからである。「個の文化」を個人の認識として、「文化リテラシー」を育成する教育をしたとき、学習者が始めから持っているステレオタイプをどのように扱っていけばよいのかという問題が、そこには残っているのである。ステレオタイプは人間の逃れられない認識のあり方で、スキーマの一つの形として捉えることができると根橋 (2000) はいう。しか

し、細川（2002b）が指摘するように、ステレオタイプの中で集団を画一的に認識する集団類型認識は個人のありのままの姿を隠し、個人間のコミュニケーションを阻害すると考えられる。西田（1999）によると、この集団類型認識にとらわれないコミュニケーションを実現するためには、本人が自己に内在するステレオタイプに気づくしかないとされる。だが個の文化Bの立場に立った「日本事情」において、いかに既存の社会集団に対するステレオタイプの文化観を自覚化していくかは明確でない。その点においては個の文化Aに立った「日本事情」では、「日本社会」について意識的に考え、他者との認識の違いを確認することで、「日本文化」がいかに曖昧な概念であるかということに気づくことになるかもしれない。

このように、「日本事情」クラスでの実践を考えたとき、AとBでは違う形が想定でき、それぞれがメリット・デメリットを持っている。次に筆者が受講者として参加した二つの「日本事情」クラス（一方はA、他方はBの立場が色濃いと思われる）を分析、比較検討することによって、その特徴と問題点を明確にしたい。

3. 二つの授業分析—2001年秋学期「日本事情」と2000年春学期「日本事情」

3-1. なぜこの二つの授業分析を行うのか

早稲田大学日本語教育研究センターにおいて細川英雄がコーディネイトとした2001年秋学期の「日本事情」クラス²は留学生9名、日本人6名の合同で行われ、「私にとって日本文化とは何か」というテーマについて授業中のディスカッションを通して、レポートをまとめる、というものであった。「日本文化」というものを個人の視点によって発見するという試み、また「日本文化」というものが個人の認識によって違うということを自覚する試みであったと筆者は捉えている。その点において、この授業は個の文化Aという考えを大きく反映したクラスになっているといえるだろう。よって、この授業分析を通して、個の文化Aの立場に立った授業実践の特徴、問題点が明らかにできると考えられる。

それに対し、同様に細川が組織した2000年春学期の「日本事情」クラスは留学生6名、日本人3名で構成され、魅力ある人物と各自が考える人にインタビューをし、インタビューが、自分にとってなぜ魅力があるのかをレポートにまとめる、というものであった。この授業では「日本文化」というものをあえて切り取ろうとはせずに、他者との一対一の対話を通じて、自己の認識の変化を促すという、個人の認識である個の文化Bに働きかけた授業であった。個と個のコミュニケーションに重点を置いたという点で、この授業は個の文化Bの立場に立ったクラスになっている。従って、この授業分析により個の文化Bを基にした授業実践の特徴、問題点が浮き彫りになるであろう。以上が、筆者が分析対象としてこの二つの「日本事情」クラスを選択するに至った理由である。³

3-2. 個の文化Aの実践として—2001年秋学期「日本事情」—

3-2-1. Mの分析

韓国からの交換留学生として教育学部教育学科に在籍したM（20代女性）を通して2001年秋学期「日本事情」を分析する。Mを分析対象とした理由は、彼女は小・中学生時代を日本で過ごした自分自身の体験を通して「私にとって『日本文化』とは何か」とい

う問いに答えようとしている、つまり個の文化Aの立場で「日本文化」を眺めているのに関わらず、それはいたってステレオタイプのなものであったということである。また、そのステレオタイプのな認識に疑問が投げかけられても、その意見を取り入れることができないまま硬化してしまったことも分析対象とした理由に挙げられる。

クラス活動は、はじめに各自が「私にとって『日本文化』とは何か」というテーマについて、A4一枚程度で書き（「仮説」）、それについてクラス内でディスカッションをし、議論の内容を踏まえ、再度、各自の「日本文化」論をまとめるという手順で行われた。その際、細川によって「私にとって」ということが強調され、各自が自己の体験を通じた「日本文化」を語ることが求められた。

はじめにステレオタイプのな認識から抜け出せないMのレポート作成のプロセスを追いかけて、次にその要因をこの活動のテーマ設定の点から検証する。

3-2-2. ステレオタイプのな認識から抜け出せないM

Mはその「仮説」で以下のように述べている。

①まず、文化というのはその国の政治、学問、芸術、道徳、宗教など、生活様式であり、その国の人々によって築き上げられるものである。（中略）②…中学のころ感じていた日本文化というのは学校での生活の中で、形成されたものであった。韓国の学校と違ってのが集団性を強調していたことであった。（中略）…③中学にあがたら中学は中学で、韓国では運動会とか文化祭とかがあったら、その前練習をするのはなく、そのまま本番を向かえ、自分が一等賞をとるためにがんばっていたのに、日本はクラスが優勝するためにみんなで力をあわせることが多かった。（中略）…日本の中学で学んだことの中で、一番記憶に残っているのは集団性であった。（中略）「わたしにとって日本文化はずばり集団への順応、強調によって築き上げられたものだと思う。」

（2001. 11. 19のMのレポートより）

傍線①からも明らかなように、Mは文化を国で線引きしている。そして、傍線②のように「日本文化」と「韓国文化」との対比の下に論を展開している。その結果至った結論は「わたしにとって日本文化はずばり集団への順応、強調によって築き上げられたものだと思う。」という「日本文化」=集団主義といった至極ステレオタイプのな文化観である。

しかし、Mはこのステレオタイプのな文化観を自らの体験を通して獲得したものとして描いている。このMの「日本文化」は傍線③にあるように自らが、中学時代を日本で過ごした体験によって、自らが認識した「日本文化」なのである。この点において、これは個人が認識した「文化」、すなわち個の文化Aといえる。

このステレオタイプのな文化観に対し、クラス内のディスカッションでは様々な意見が出た。担当者である細川自身も「日本文化」と文化を国で線引きする理由を尋ねている。

細川：それは、それほどこの集団性がなかったわけ。これは日本のどこですか。場所。

M：大田区です。

細川：④東京の大田区ね。ふうーん、世田谷区はどうか、日本中はみんなそうなの？

M：というか前に書いたように、⑤文化とは、自分が感じ取ったものを文化といえるというから、私は大田区に住んでいたから、

細川：⑥それはMさんの文化じゃない？

M：⑦はい。だって、私にとっての文化だから。

細川：だから、日本ってつけたとき、それは、Mさんが感じた、そうか、そうか、それを日本というところでくくったわけね、それをじゃあどうして大田区文化でないの、日本文化なの
細川は集団で文化を括ることへの疑問をMに投げかけるが、Mには理解できない。Mは自分にとっての「日本文化」を語っているのであり、他人と「日本文化」の認識が異なるのは当然だが、自分の目を通した「日本文化」なのだから構わないと考えている。そのことが顕著に現れるのは、傍線④から⑦である。細川はいかに「日本文化」という線引きがなされるかを質問したが、Mは「私にとっての『日本文化』」なので、自分が感じた「日本文化」を語ればよいと考えている。それは傍線⑦「はい。だって、私にとっての文化だから」ということばに集約されている。Mが以後も「私にとっての『日本文化』」だから、自分が「日本文化」だと感じたものを記述すればよいという考えに縛られているのは、次に提出されたディスカッションを経て考えたことをまとめたレポートで明らかになる。

……私にとって、今まで、私が思ってきた日本文化はそうだと、自分なりに考えてみたものが、本当に日本文化と言えるの？って言われたときは頭の中が、真っ白になったし、頭の中で、疑問が浮かび上がって、わからない状態になった。

⑧外国人にとって、日本を理解していくのは、自分のいろんな体験や経験からくるもので、これが、本当は日本文化とは言えないんだよ。といわれるとますますわからなくなってしまう。これは文化の捉え方が違うものなのか。外国人は他国の文化をまず、自分の国との比較から捉えていくのだと思う。⑨自分が、暮らしていく中でこれは韓国にない。これは日本独自のもの。これは日本文化なんだな。と。(中略)…しかし、⑩日本の食事の仕方は全国で一緒だと思う。韓国も全国同じ食べ方をする。(中略)…⑪私が、日本人ではなく、外国人であるからなのか日本の文化は存在しているように思われる。(中略)地域によって、言葉も少し違ったり、考え方も少しずつ違うかも知れないが、⑫日本という枠中での違いであるのではないだろうか。

⑬最初の日本文化とはずいぶん異なっていると思うが、私にとって日本文化とは日本という枠の中での生活様式であり、ことばであり、ことば、生活習慣を含む感じる全てのものだと思う。

(2001.12.17.Mのレポートより)

傍線⑧のように、Mは「日本文化」というものを自分の経験から認識していると主張する。その認識の大前提としての「韓国」「日本」という枠組みは、明確な理由も提示されないまま、絶対的な枠組みとしてMの中で変わることはない。傍線⑨、⑩、⑪、⑫のように常にMは「韓国人」あるいは「外国人」として「日本」の中の現象を「日本文化」として認識するのである。そして、自分の認識したものが個人の「日本文化」であるという前提から、Mの文化観への疑問は「文化の捉え方の違い」として退けられてしまう。この時点でのMの「日本文化」の定義は傍線⑬であるが、「集団主義」ということばは表へ出てきてはいないものの、「感じる全てのもの」の中には「集団主義」は含まれているものと思われる。

クラスではMがなぜ「日本」「韓国」という国の単位で文化を認識するのかに対する質問が出た。だが、Mはそれに明確な回答を与えないまま、国という枠にとらわれ続ける。

細川：まあ、いいや、いいや。普通だと思ったのは、見て、要するにそれを普通だと思ったのね、本当に、⑭みんな日本中が全部そうやっているかを確かめたわけじゃない

M：っていうか、⑮食べるときに、結構聞いてみたんですよ、こうやって食べている、日本人

はこうやって食べているって、いろんな人に。

細川：聞いた人も日本のこと全部知っているわけじゃないわけね？わたしはそうしてるっていうだけでしょ？

M：でも、やっぱり日本人と食べに行くときに、そういうふうに乗っている人とか多いから、

細川：まあ、いや、そういうふうにならなると、それで、わたしがそう言うのと、わたしが日本という枠で、分けて文化というのかもしれない、それも地方によつての違いであつて、日本文化とは言えない、しかし、⑩日本の食事の仕方は日本全国でいっしょだと思ふ、その根拠は何？

M：⑪自分で考えた。

細川はMが「日本」という枠組みで文化を括ることに傍線⑭、⑯のように再三問いかけるが、Mは自分が「日本」での経験を通して感じたということに固執する（傍線⑰）。結局、Mは自分が感じたものが「文化」なら傍線⑳のように自分が感じた「日本文化」を述べる、ということに終始している。二回のディスカッションで細川から「日本」＝集団主義ということへの疑問、「日本」という枠組みで文化を考えることへの疑問が出たが、Mはそれを自分の文化観へ取り入れるまでには最終レポートでは至らなかった。

私にとって日本文化は何かという題目の元、私は自分の実体験に基づいて、日本文化について述べた。（中略）…⑰日本の文化を見る視点じたいが、私とは異なっている人が多かつたため、何か食い違いが生じたのかもしれない。⑱私は日本の文化を客観的な視点で見ると、不可能であつて、外国人として韓国の文化と比較して見ようとする。そのような比較から見ると日本文化は存在しているように思われる。（中略）

私たちは社会での生活、教育の場面で社会を身につけていくのである。

⑲私が思うに国が存在する限り、その国ごとの文化は存在するのである。

文化＝国（社会、規則、規範、教育）

（Mの最終レポートより）

傍線㉑に明らかなように、Mは「文化」を国という枠に基づいて捉えることには最後まで疑問を抱かなかつた。むしろ、その思いを強くした結果となつたといえるだろう。では、再三のインターアクションで疑問が投げかけられたのに関わらず、なぜ、このようにステレオタイプの文化の捉え方に陥つてしまつたのかについて次に考察する。

3-2-3. Mの分析のまとめ—Mがステレオタイプの文化観から脱却できなかつた理由—

Mは文化を国で括ることから抜け出せなかつた理由を一概に一つに断定するのは難しい。それはMの生活背景に起因するものかもしれないし、彼女の個性と深く関わっているものかもしれない。だが、その一因として、この授業テーマが「私にとって『日本文化』とは何か」であつたということが考えられる。

「私にとって『日本文化』とは何か」というテーマは個の文化A、つまり個人が「文化」として認識したものが「文化」である、という考えと結びついているように思われる。細川は「大体、日本社会とは、これこれこういうものだと決めたところで、別に意味が無いわけですから、それは、みなさん一人一人の日本文化があつていいわけですけども…」（2001.10.1.授業記録より）と述べている。この観点からすると、Mは確かに、自分の体験を基に感じた「日本文化」を終始語っている。そして、M自身、そのことをたびたび主

張している。最終レポート結論部で、傍線⑨「私は日本の文化を客観的な視点で見ることは、不可能であって、外国人として韓国の文化と比較して見ようとする」とあるようにMはけして、自分の述べている「日本文化」が客観的な事実で、すべての日本人に当てはまるものでなければならない、と考えているわけではない。ただ自分が「日本文化」だと感じたことを記述したに過ぎない。

このことは学習者S（韓国人20代男性）も問題化している。「でもいまの主張は先生ちょっと変ですよ。先生が今まで言ったのは、私にとって日本文化ってということで、自分がこれまで人生の中で体験してきたもの、本で読んだことを自分の眼から見てそれを自分の窓としてみた日本文化ということですから、自分が体験した日本の中学校での体験を見て、それを通して日本文化はこれだというのは正しいんじゃないですか」（2001.11.19の授業記録より）という、細川が日本すべてを見たわけではないのになぜそれが日本文化といえるのかという趣旨の問いかけをMにした際の彼の発言は的を射ている。それに対し、細川は「そうそう、それはいいの、だけど、それをどうして日本という、ことでくくらないかならなければならないかと、次のレベル、次の段階に進んでいるんです」（同上）と答えているが、もしそうになると、誰一人として自分の体験から「日本文化」を語れないということになる。担当者はまさにそのこと、すなわち、誰も「日本文化」などというものは認識できないというところにたどり着きたいのかもしれないが、このように言われてしまうと、一人一人の「日本文化」などは存在しえない。そのことに学習者は反発を見せる。Mも次のように言っている。「……私は存在しないって、みんな言ってたじゃないですか、日本の文化は存在しないとか、アジアの文化とか地球の文化は存在するとか、そしたら私は存在するというのを他の人がみんな存在しないっていうから、それに合わせていかなきゃいけないんですか」（2001.12.17.授業記録より）

以上のように、最初にテーマを「日本文化」と設定した時点で、「日本」「韓国」のような枠組みで「文化」を認識するように半ば運命付けられているといえる。そして、「私にとって」とすることで、個々の認識は違うという前提に立つため、他者の意見を取り入れることは難しくなっていることが傍線⑩「日本の文化を見る視点じたいが、私とは異なっている人が多かったため、何か食い違いが生じたのかもしれない」などからもわかる。このことから、個の文化Aに立った実践はステレオタイプにとらわれたまま活動を終えてしまう可能性が高いことが推測される。

従って、個の文化Aの立場を色濃く反映した実践では、「日本文化」というテーマ設定の時点で、ステレオタイプの認識を誘発するという問題点により、ステレオタイプの文化観から自由になったコミュニケーションを実現させることは難しいことがわかった。

ただ「日本文化」を意識的に考え、他人の文化観に触れることは完全に否定されるものではない。前述のようにステレオタイプを乗り越えるために必要なのは自己の中にあるステレオタイプを意識化するという主張がある。その意味では「日本文化」を意識化したことは今後、彼女が「文化」について考えるためのきっかけにはなりえたと思われる。

次に、「日本文化」というテーマ設定をせず、個と個のコミュニケーションを重視した活動、個の文化Bの立場を強く反映した2000年春学期の「日本事情」の活動を分析する。

3-3. 個の文化Bの実践として—2000年春学期「日本事情」—

3-3-1. Oの分析

2000年春学期の細川が担当した「日本事情」クラスでは、「魅力ある人物」をインタビューするという活動が行われた。はじめに学習者が各自、自分がなぜ、その人が魅力ある人物だと考えるか（「動機」）ということをおよそ一枚前後で記述する。その後、インタビューの内容、またインタビューを通じた考えたことをクラスに報告する。そして、クラスでのディスカッションを経て、レポートに仕上げるとするのが一連の活動である。この活動の目標は、自分にしかかけないインタビューの魅力を書くことであると、細川は学習者に伝えたが、それは学習者とインタビューの、個と個のコミュニケーションを成立させることが根底にあるだろう。

ここでは中国からの留学生で法学部に籍を置くO（20代女性）を対象としてこのクラスを分析する。Oを分析対象とした理由は、当初Oがインタビューの相手を「日本社会」や「日本人」という一つのステレオタイプとの対比において捉えていたのに関わらず、インタビューを通じて、そのステレオタイプにとらわれず、Oとインタビューの相手と個と個の関係について語るようになるという変容が見られたからである。つまり、個の文化Bの立場に立った授業によって、個と個のコミュニケーションを深めることを通じ、ステレオタイプにとらわれない個との関係を築いたという点に注目したい。

Oはレポート製作の過程で日本社会の中のNを見るという視点から、彼女を通して自分自身について考えるという対一の対話の構造へと自然に移動する。社会一般という曖昧なもの個人、「人情が無視されつつある今の日本社会」と「Nさん」という構造から個人と個人、つまり「わたし」と「Nさん」という個人同士の構造にインタビューと授業を通じて変化していく。本分析ではその構造の変容をたどり、個の文化Bがステレオタイプの文化観に束縛されない個と個のコミュニケーションを成立させる可能性を探っていく。

3-3-2. Oの描いた社会と個人の構造

Oは最初に提出した「動機」で以下のように書いた。

初めてNさんに会ったのは去年の夏頃だった。

センターで、わたしはNさんの中国語家庭教師として紹介された。（中略）

…“うちのお父さんだよ、五年前から病気になって、今は半身麻痺の状態です。でも大丈夫わたしが看護してあげるから。” Nさんは養父のために、結婚を諦めた。

①人情が無視されつつあるいまの日本社会で、Nさんは独特の存在として輝いていた。

こうして私は彼女に興味を持ち始めた。

（2001.4.27. Oのレポートより）

傍線①からOが日本社会に対する一つの固定観念を抱き、それに対してNの存在はその枠の外にいるという捉え方をしている事がわかる。Oは自分の中にある「日本社会」というものに、Nを対比させて、「日本人には、こんな、自分の思い描いた典型的日本人に当てはまらない人もいる事に驚いた」というような紋切り型の結論を導き出そうとしている様子が見受けられる。これは最初の授業で細川がこの活動で目指すレポートの作成例として提示したレポートのタイトルが「社会的な規範から抜け出す」というものだったことによる影響かもしれない。だが、一般論的な日本社会という概念を解体していくことと、

自分の中にあるそれに当てはまらない人間をその社会像に対比する事の微妙な、だが、致命的な意味の違いを見落としている。後者では「当てはまらない人間」を例外として排除することによって、集団類型的な「日本人」像はより強固なものになる可能性がある。このことは五月一日の授業で細川の指摘を受けている。

細川：他に何かありますか？…今のOさんの言葉で人情が無視されつつある今の日本社会で、と書いてありますがどうしてそう思うんですか？

O：②日本に来る前の日本人にたいしてイメージがちょっとあります。

細川：それはOさんがそう思っているだけであって、そうでないかもしれないじゃない。つまり、日本の社会は人情が無視されつつあると思うのか根拠がわからない。だからそれはどうして？ 人に聞いたから？ 日本は人情が無視されつつありますよ、と聞いたことがあったから？

O：そういうのもありますけど…

細川：ここはとても大切な所なんですよ。③人情が無視されつつある日本社会でNさんは独特の存在として輝いていたと書いてありますが、もし人情が無視されていなかったらNさんは独特の存在じゃないのか。

O：日本の社会は人情があるかどうかは問題じゃなくて。Nさんは自分の養父の為に普通の人は養父の為に結婚とか諦めて一生養父の付き添っていることが珍しいから、普通の人情の限界を超えて独特と思っているから。

細川：うんそうでしょ。それはOさんにとって独特の存在だったわけで、④別に日本社会が今、人情が無視されつつあるから独特なんじゃないんでしょ。

傍線②のようにOは日本社会を「人情のない」社会として捉えている。それに対する細川は傍線③、④のように指摘にした。最初の「動機」において明らかにOの中には、「日本社会」への固定観念に対するアンチテーゼとしてNという存在を見ていた。そしてその事がクラスにおいて指摘された。それがいかなる変遷をたどるかを次に見ていく。

3-3-3. 社会と個人から個人と個人へ

Oが「日本社会」とNではなく自分とNという視点でものを見始めるのは一度目の下書き(2000.6.26.)からである。

…⑤町のニュースを見聞きするにつれて、人との関わりを忘れてしまった様相に心を痛めることが多くなった。それも最初にわたしはNさんにインタビューしようと思ったきっかけだった。Nさんは思いやりがある人である。(中略)…⑥普段わたしは「本当の自分」というものが存在すると信じて生活している。しかし「本当の自分」はいったいどこにあるのだろうか？Nさんのインタビューを通してそれを改めて考えた。

(2000.6.26.Oのレポートより)

依然として、Oの「日本社会」というもののイメージは抜けていない。ただ、前回の指摘から、言葉を変えて見えにくくしているに過ぎない。レポートの下書きの一章「はじめに(動機)」の中で、「町のニュースを見聞きするにつけ、人との関わりを忘れてしまった様相に心を痛めることが多くなった」(傍線⑤)と書いているが、これは「人情が無視されつつある今の日本社会」(傍線③)と内容はほぼ同義である。だが、彼女は「動機」の最後に自分のことを語り始める。彼女は言う、「「本当の自分」はいったいどこにいるだろ

うか？ Nさんのインタビューを通して、それを改めて考えた」（傍線⑥）と。これが対話の始まりを告げている。ここではじめて、Oは自分について語るのである。そして、それはNとのインタビューを通して、自分について改めて考え出したからだと言う。これまで、「日本社会」と「Nさん」という視点で物事を考えようとしていたのに対し、ここではOは「自分とN」という視点で物事を語り出している。

なぜ、このような視点の変化がOに見られたのだろうか。それは、細川から指摘を受けたからであろうか。もちろん、それもあるが、それだけではOの「日本社会」というイメージが依然として言葉の陰に息を潜めている事の説明がつかない。おそらく、この視点の変化は、インタビューを通して、Oの想像していたアンチ「日本社会」としてのNが幻想に過ぎないということを実感していったことによるものであろう。「日本社会」とアンチ「日本社会」Nという構造はアンチ「日本社会」の方から崩壊を見せるのである。一つの象徴としてのNが崩壊した後、立ち現れたのは他でもない、ひとりの人間としてのNである。ここでNとOという構造が生まれる。インタビューの内容を見るとOが、不幸な人としてのNに対する固定観念がN自身によって否定されているのがわかる。

O：⑦ほかの同年齢の女の人と比べると、いっぱい苦労しましたね。

N：⑧確かにいまの生活は大変ですけど、楽しいこともいっぱいありますよ。わたしのほうは中国語やダンスのレッスンを取っていますから、毎日本当に充実感を感じています。父のほうはいまパソコンに夢中になっていて、メール友達がいっぱいいます。自分もただ座っているだけでなく、収入も得られるような仕事を考えています。ときどき休みの日は二人で公園に行ったり、牧場（田舎）方面に出かけたり、外の新鮮の空気をすうようにします。

O：結婚とか考えたことはありますか？

N：⑨好きな人はいますし、「できればこの人と結婚してみたいなあ」とも思いますけど、今の自分の生活や、生き方をまるっきり否定されるような状況なら、そんな生活はいりません。

(2000.6.26.Oのレポートより)

確かに、母親の離婚、死、養父の半身不随などを背負って生きているNであるが、それでも彼女はOが思い描いたような、悲壮感を生活に漂わせていないのがわかる。少なくともインタビューの中では彼女は自分なりに自分の生活に喜びを見出しているようである（傍線⑦、⑧）。また結婚も養父のために結婚できないと考えていたOであったが、Nの見解は多少違う。Nは自分の生活が否定されるなら、結婚は必要ないと言っている（傍線⑨）。このOがインタビューをする以前に抱いていたNという人物像とインタビューを通して見えてくるNの人物像の違いがOに驚きを与え、Oはその驚きから、自分自身について考え始める。下書きの「おわりに」において、OはNが「本当の自分」の枠から抜け出したことにより、幸せを見つけたと考え（傍線⑩）、それを自分自身に還元して考えている（傍線⑪）。それはこの下書きのタイトルが「『本当の自分』との対面」となっていることに象徴されている。

……⑩彼女は「本当の自分」の枠から抜け出したこそ、今の幸せの自分を見つけたわけだ。

⑪生きるということはまさに自分を他者との関係の中で「本当の自分」をチェックしながら作っていく存在だと私は考える。

OはNとのインタビューを通し、自分とNという個と個の構造に至るにつれ、Nにつ

いて考えると共に自分自身について考えていく。次にこの過程をもう少し詳しく見てみたい。

3-3-4. 「本当の自分」の解体

Oは最終レポートにおいて、大幅に「動機」に修正を加える。前の下書きにおいて見られた「日本社会」とNという構造はほとんど影を潜める。「Nさんは人に対して思いやりがある人である」という一文が姿を消すのである。そして、その焦点は前よりいっそうに、NとO自身に絞られる。

……彼女は小さい頃から厳しい生活環境の中で育てられてきた。それでも、いつもいきいきしている彼女の前向きな姿を感心すると共に、彼女を支えているもの、および人生の目的を知りたくなってきた。

ちょうどその頃、自分も迷っていた。いままで、ずっと時間に追われて生きてきた。二十代に入ると、突然自分は、時間を追って生きているのだ思えるようになった。こうなってくると、生き甲斐を感じるようになった。それでも、時折、ふっと生きるとはいったいなんだろうかと考えることがあった。

そこで、今回のインタビューを通して、⑫Nさんを支えている精神的なものを発見するとともに、自分の生き方も見つけようと思う。(2000.7.3.Oのレポートより)

ここに、Nを通して「日本社会」でなく、自分自身を見つめる姿勢が明確に表記されている(傍線⑫)。注目すべきはその変化と共に彼女は彼女自身の変化を遂げている事である。第一回目の下書きにおいてタイトルを『『本当の自分』との対面』として、インタビューを通じて自分自身への考察を始めたOであったが『『本当の自分』との対面』はそのまま「本当の自分」の解体へと続いていく。下書き段階の動機に書かれていた、「わたしは「本当の自分」というものが存在すると信じて生活している」(傍線⑥)という言葉は、最終レポートでは省略される。そしてタイトルも「殻からの脱出」へと変わる。

だが、「本当の自分」とはいったい何なのだろうか。同じ問いをOは下書きの段階で自分に発していた。前にも引用した「しかし『本当の自分』はどこにいるだろうか？」(傍線⑥)がそれである。彼女は「本当の自分」がどこかにいると信じている。ここで彼女にとっての「本当の自分」とは何か普遍的な真理のような像を指しているように聞こえる。

しかし、その「本当の自分」という考え方は徐々に変容していく。先に、『『本当の自分』との対面』という題が象徴するように、下書きの最後にOはNに対する考えを自分自身に還元した、という内容のことを記した。けれど同時にそれは初めにOが描いたような普遍の「どこかにいる」「本当の自分」を否定している(傍線⑩、⑪)。

ここでは「本当の自分」というものは捨てるべき固定観念としてみなされている。絶対的な「本当の自分」があるのではなく、相対的に他者との関係の中で築かれるものこそが「本当の自分」であるとOは考えるに至る。それは「本当の」という形容詞を必要としない「自分」である。彼女は最終レポートの「結論」で再びこの言葉を繰り返すが、その前に「しかし『本当の自分』とはあくまでもほかの人からもらったイメージにすぎない」と述べている。ここに「本当の自分」の解体が見られる。

3-3-5. Oの分析のまとめ—ステレオタイプに縛られないコミュニケーション—

この「本当の自分」の解体は注意深く考える必要がある。Oの考えでは、自分があると信じた「本当の自分」とは実は他人から与えられた虚像にすぎず、それを打ち破っていくことによってのみ、「自分」は成長していくことができる。だが、その「自分」を形成するためには他者との関係によって自分自身を確かめることが必要であるというのである。一見、これは矛盾するかに見える。しかしこれはまったく矛盾していないのである。ここで便宜的に虚像を与えるものを「他人」と呼び、自分自身を形成する過程に貢献しうるものを「他者」と呼ぶ。実はこの「他人」と「他者」そのものに決定的違いが含まれるのではない。その決定的違いはむしろ、それに対する自己の方にある。「他人」のイメージを鵜呑みにしてしまう自己と「他者」との関係に積極的に働きかける自己という違いがそこにはある。つまり、「他者」に写った自分に対して自分自身がもう一度考えることによって初めて、自分というもの、Oが良い意味で使っている「本当の自分」が創られていくのである。

これは「コミュニケーション」の本質に繋がっていると思われる。ただ言葉を発すること、受け取ること、もしくは交わすことが「コミュニケーション」ではない。他者との対話を通して、自己について考えることによって、初めて「コミュニケーション」が可能になるのではないか。もちろん、自己は他者にとっての他者となり、その逆もある。お互いがお互いのはね返ってきたものをもう一度、自分の中で消化することが必要なのである。

そう考えると、Oはインタビューの始めの頃、Nの言葉を自分の中へ取り込まずに、彼女を何処かの「他人」から与えられた虚像である「日本社会」と対置していたという点において、「コミュニケーション」を成立させることに失敗していた。それが徐々にNの言葉を受け入れ、それを自分と照らし合わせながら考えていく事によって、「コミュニケーション」を成立させていった。いわば、NはOにとって「他人」から「他者」へと変わったのである。すると、Oが言うように「本当の自分」というものが「他人」からのイメージをそのまま受け取った虚像にすぎないものならば、「日本社会」とNという構造から、O自身とNという構造の変化と平行するように「本当の私」が崩壊していくのは必然であったと考えられる。「本当の私」も「日本社会」も、同じように「コミュニケーション」によって乗り越えられる幻想に過ぎないからである。

以上のように、インタビューを通して、社会と個人の関係から個人と個人の関係へとOの視点が変わっていく様子がわかった。個の文化B、すなわち、個人の認識を「文化」として、その「個の文化」を育成するという立場に立った授業によって、Oは自らの認識を変容させた。そして、その変容は「日本社会」とNという構造から、O自身とNという構造に視点を変えていくことによりなされたことは大変興味深い。このことは個と個のコミュニケーションを重ねていくことこそが、個を集団類型化した「日本人」などにとらわれずに認識する力を育成することを示唆している。この認識力こそがコミュニケーションに必要であり、だからこそ、日本語教育に必要とされるはずである。

ただ、Oの最終レポートは「日本社会」というステレオタイプを乗り越えていくことを暗示させているものの、おそらくOは依然として、「日本社会」は「人情のない社会」と考えているだろう。「日本社会」という認識の方法自体は変容していないのである。

4. 結 語

以上、「個の文化」が二つの概念を混同させているという問題意識から出発し、個人が「文化」として認識したものが「個の文化」であるとする個の文化A、個人の認識、精神活動などの総体を「個の文化」とする個の文化Bに分けた。そして、それぞれの概念を大きく反映していると思われる二つの「日本事情」クラスの分析を通して、二つの「個の文化」の意義と問題点を、ステレオタイプにとらわれない個と個のコミュニケーションの実現という観点から明らかにした。個の文化Aの立場に立つ場合、「日本社会」という枠で「文化」を捉えることを余儀なくされてしまうために、ステレオタイプに陥りやすいという問題があった。さらに個人の認識によって違うとの考えから、他者の意見が取り入れにくいケースを見た。それに対し個の文化Bの立場に基づき、個と個とのコミュニケーションを重視した「日本事情」によって、深く個人と対話することにより、「日本人」としての個、「日本社会」との対比においての個という視点ではなく、自分と他者という一対一の関係を築くことに成功したケースを観察した。

従って、個の文化AよりもBの立場に立つ授業の方がステレオタイプに縛られないコミュニケーション能力の養成という観点から考えた「日本事情」であるといえる。ただし、Oの分析で見たように、それだけでは学習者が持つ「日本社会」「日本人」というステレオタイプはそのまま残るだろう。授業内で観察されたコミュニケーションにおいてはステレオタイプによるコミュニケーションの阻害が見られないが、学習者はステレオタイプの社会観、文化観を保持していることに違いはない。このことが個の文化Bの授業実践の課題として残されている。

5. おわりに

二つの「個の文化」の意義と問題点を実践の分析を通して明らかにした。この二つの実践の問題点を補完するべく、筆者は個の文化Bの立場に立った授業を体験した後に、個の文化Aの授業を、体験を「振り返る」、フィードバックのような形態で取り入れることが、ステレオタイプにとらわれないコミュニケーション能力の獲得を目指す「日本事情」においては有意義であると考えている。だがこれは三ヶ月という限られた時間では難しい。その意味では、まだ具体的な「日本事情」クラスを提示できる段階には至っていない。今回、明らかにされた特徴、問題点を踏まえて具体的にステレオタイプにとらわれない個と個のコミュニケーションを実現できる「日本事情」をいかに組織するかが今後の課題となるだろう。

注

- 1 筆者は拙稿(2002)で述べているように「個の文化」は「集団の文化」と対立するものではなく、共起するものだと捉えている。従って、「個の文化」に焦点を当てた「日本事情」は、文化の持つ共同主観的なものを排除するのではなく、その背後にある多様で流動的な「集団の文化」に関わっていくのだと筆者は考えている。
- 2 このクラスは早稲田大学日本語教育センター・日本語専修課程研修「日本事情1・日本の社会」

と日本語研究講座「特殊研究1・言語文化研究」の合併授業である。留学生の日本語レベルは早稲田大学において1から8までである内のレベル8（超級）である。

3 筆者は「正しい日本語」に懐疑的な立場を取っているので、分析の引用におけるいわゆる「誤用」は明記していないが、すべて、原文のまま提示している。

参考文献

- 小川貴士（2002）「日本文化論と日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- 川上郁雄（1999）「『日本事情』教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」』創刊号 くろしお出版
- 佐々木倫子（2002）「日本語教育で重視される文化概念」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- 砂川裕一（2002）「『言語的運用力の強化という機能』に即して」『21世紀の「日本事情」』第4号 くろしお出版
- 西田ひろ子（1999）『異文化コミュニケーション』創元社
- 根橋玲子（2000）「第3章 心理的要因」西田ひろ子編『異文化間コミュニケーション入門』創元社
- 細川英雄（1999）『日本語教育と日本事情－異文化を越える』明石書店
- 細川英雄（2000）「崩壊する「日本事情」」『21世紀の「日本事情」』第2号 くろしお出版
- 細川英雄（2002a）『日本語教育は何をめざすか－言語文化活動の理論と実践』明石書店
- 細川英雄（2002b）「日本語教育におけるステレオタイプと集団類型認識」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号 早稲田大学日本語教育研究科
- 三代純平（2002）「言語と文化の統合される地平」『論集ひととことば』第3号 早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化研究室